

解説「E.FORUM スタンダード 社会科(第1次案)」について

鋒山泰弘(追手門学院大学・教授)

はじめに

社会科に教科としてどこまでの役割を担わせるのかに関して、研究者の間でも様々な見解があり¹、また教科内容にも広がりがあるため、共通理解された目標・評価基準(スタンダード)を提案する作業は容易ではない²。ここでは、学習指導要領の内容、E.FORUMの参加者の実践、社会科の「思考・判断・表現」の学力形成・評価を提案している近年の文献にもとづいて、試案を作成してみた。課題例で、注のないものについては、筆者が作成したものである。また、注の文献にもとづく課題例の記述に関しては、スペースの関係上、簡潔にまとめた。

1. 社会科の「本質的な問い」について

社会科教育研究の蓄積をふまえて、小原友行氏は、社会科の目標や学力の設定を行う際の3つの主要な問いを以下のようにまとめている³。

第1は、社会的事象に対する「どのように、どのような」という問い。社会的事象の過程や特色・構造を記述することを目的とする。

第2は、社会的事象や問題に対する「なぜ、どうして」という問い。社会的事象や問題の背景を推論によって探求することを目的とする。

第3は、社会的事象や問題に対する「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」という問い。社会的な問題の解決のための最も合理的な手段・方法を判断することを目的とする。

以上の問いは、社会科で学習者に考えさせたい不可欠な問いで、学年や単元の学習を通して繰り返し用いられるべき問いと考えられる。この試案でも、小学校3年から中学校3年までの社会科教育に共通する「本質的な問い」を「社会的事象や問題にはどのような特徴がみられる

のか。社会的事象や問題の特徴はなぜみられるのか。よりよい社会を形成するためには何をどのようにすべきか」と表現した。

2. 社会科の領域区分とスタンダード

スタンダードをまとめていくための小学校3年生から中学校3年までの社会科の領域区分に関しては、基本的に学習指導要領の枠組みに準じた。小学校3・4年では、「地域の地理」「地域の生活基盤」「地域の生産と販売」「地域の歴史」に、小学校5年では、「国土と環境」「農業と林業」「工業」「情報産業」に、小学校6年では、「日本の歴史」「政治と憲法」「日本と諸外国、国際社会」に区分した。中学校では、地理、歴史、公民の3つの領域で区分したが、地理に関しては「世界の諸地域」と「日本の諸地域」に区分して課題例をあげ、公民に関しては、「政治」と「経済」に区分して課題例をあげた。このように学習指導要領の教科内容区分に関してはできるだけ、もれなく位置づけるようにしたが、単元レベルの教科内容に関しては、スペースの関係上、多くが省略されてある。今回の試案では、その領域における重要で不可欠な「本質的な問い」をあげ、単元レベルでは、「永続的理解」「課題」の例を位置づけ、スタンダードの表現を示そうとしたものである。

3. 社会科における目標を表現する用語

社会科におけるスタンダードを簡潔に記述するためには、使う用語の意味について共通理解が求められる。

例えば、この試案では、「特色」と「特徴」という2つの用語を使っている。「特色」という用語は、一般にある事柄の肯定的な側面をさし、

「特徴」という用語は、肯定面だけではなく、否定的な側面も意味するのが一般的である。試案では、「社会的事象の特徴」と表現する時は、社会的事象の肯定的側面と否定的側面（課題や問題を含む）の両方を表す意味で用いている。地域や時代の「特色」と表現する時は、その地域や時代に、どのような肯定的に評価できる側面を見出すのかという意味で使用している。また地域や時代の肯定的に評価できない側面も明らかにするという意味では「特色と問題」という表現を用いるようにした。

また、小学校の学習指導要領や教科書では、「努力」「苦労」などの日常用語がよく使われているが、この試案では、それらの用語の使用は避けた（「工夫」については一部用いた）。それらの日常用語を用いて「本質的な問い」や「永続的理解」を表現することで、授業の「内容が表面的なレベルに留まったり、学習が情緒的に流れてしまうことになりかねない」⁴ことを避けることを意図している。例えば、「地域の特色は過去の人々のどのような働きによって形成されてきたか」という「問い」で、「働き」という用語を使用している。この用語で、過去の人々が何を目的に、どのような手段・方法で、どのような成果をあげたのかを分析的に理解する必要性を表現しようとした。

4. 単元の「本質的な問い」と「永続的理解」

先に述べたように単元の「本質的な問い」と「永続的理解」は、社会科の教科内容全体は網羅しておらず、事例として示したものであるが、課題例と対応させている。中学校の歴史分野での「歴史像・歴史解釈はなぜ違うのか、なぜ変わるのか」「歴史像・歴史解釈はどのように利用されるのか」という問いに関しては、中学校学習指導要領では、位置づけられていないが、社会科のスタンダードの中に位置づけたい「問い」として書き加えた。その他の単元の「本質的な

問い」の例は、学習指導要領に含まれている。

「永続的理解」の表現は、学問的用語をできるだけ使用しているため、抽象的で、小学生・中学生にとって、そのままでは、理解しにくい表現になっている。あくまで、教師が何を子どもに「理解」として残しておきたい内容なのか、そのエッセンスを意識するための指標である。実際の授業や学習の評価は、小学生・中学生が自分の言葉で「永続的理解」を表現できているかが、評価基準となるが、このスタンダードの表ではそこまでは示していない。

おわりに

社会科のスタンダードを提案するに当たって、E.FORUM 参加者からは、社会科の各領域において外してはいけない問いや理解に立ち戻ることができるようなスタンダードを設計すれば、各地域・学校の特徴に応じて社会科の単元を構成したとしても、必要に応じてスタンダードに戻りチェックを行うことで、軸のぶれない実践が生まれるのではないかという意見をいただいた。今回のスタンダード試案では、社会科のすべての教科内容には、対応できていないので、そのような参照枠の水準には達していないが、今後、各地域・学校の実践をふまえて、よりよいものにしていきたい。

¹ 社会認識教育学会編『新社会科教育学ハンドブック』明治図書、2012年を参照。

² 優れた社会科の指導案を編集する形で「スタンダード」を提案したものとして、全国社会科教育学会編著『小学校の“優れた社会科授業”の条件』明治図書、2007年、同編著『中学校・高校の“優れた社会科授業”の条件』明治図書、2007年がある。

³ 小原友行「社会科教育の基盤」全国社会科教育学会編、『社会科教育実践ハンドブック』明治図書、2011年、13-14頁。

⁴ 片上宗二『社会科教師のための「言語力」研究』風間書房、36頁。